



羅針盤



石河 晃
Akira Ishiko

東邦大学医療センター大森病院皮膚科 教授,
Visual Dermatology 編集協力者

皮膚科エキスパートへの道

皮膚科の醍醐味はなんと言っても、見ただけで診断を瞬時に決定し、その原因までも推理小説の探偵のように言い当ててしまう、経験と知識に裏付けされた形態を見抜く能力にあると思います。もちろん、診断を確定して、的確な治療により治癒に至らしめるには血液一般検査、画像検査、病理検査、細菌学的検査、免疫学的検査などが必要です。患者さんと良好な患者-医師関係を築くことも大切です。しかし、皮膚科の診療行為のほとんどは皮疹をみることで始まることは疑いの余地がありません。

右の挿絵をご覧ください。

この絵を紹介することで私が伝えたいメッセージがわかりでしょうか？ 男が鳥を見つめるように何でもじっくり観察しよう、ということではありません。

男の後ろに白馬がいるのに気づきましたでしょうか？ 一度見えてしまうと二度目からは馬の姿が勝手に目に飛び込んでいませんか？ 形態認識とはこのようなもので、大事な所見を覚えると、おのずと向こうから語りかけてくるようになります。どこにポイントを置いてものをみるかで、見えてくるものがまったく変わってくるのです。皮膚科診断学は形態認識そのものです。まずはその形態をしっかりと記録することから始めましょう。

皮膚科医は幸いにして、マクロとミクロを一人で見るのが可能です。マクロとミクロをつなぐものにはダーモスコピーがあり、目で見えない内部構造をみるツールとして超音波断層検査があります。このような診断ツールのすべてにおいて、高い形態認識能力が重要です。まずはこの所見をみたらこの病気、とシンプルに連想できる骨組みをつくることです。そして、その骨となる疾患



『旅人と白馬』作画：草地元 (<http://www.ne.jp/asahi/kusachi/gen/public/index.html>) (許可を得て転載)

に似て非なる鑑別疾患の肉をつけてゆくことが肝心です。

これには机上の知識も重要ですが、修練の方法として、臨床診断を考える際にミクロである病理組織像を想像することがしばしば役立ちます。また、その逆に病理診断を考える際に、マクロである臨床像を想像することも重要です。そもそも人体は遺伝子で規定されるため、今後遺伝子を意識した形態学が新しい切り口になってくるかもしれません。

今回の特集では皮膚科新人のため、形態学的ツールの使い方について、そのエキスパートの先生方に勘どころをわかりやすく解説していただきました。これを端緒にエキスパートへの道を歩まれることを期待しています。